

第2回フレックスコミックス異世界マンガ作画大賞 課題作品4 (女子向け)

◆概要

不遇な境遇だが健気で芯は強く仕事ができるヒロインが、内面はヤンデレでヒロインに対する不器用な愛以外は完璧な宰相ヒーローに溺愛される物語

◆キャラクター設定 (下記3名のキャラクターデザインを作成して下さい)

○ティアーナ・ウェルシュ

女性 23歳

伯爵令嬢 158cm 真面目な印象

茶色のロングヘア 癖が強めのウェーブ (本人はくせ毛を気にしてキッチリまとめていることが多いがヒーローはそれが好き)

大きな瞳 人がよさそう 緑色の瞳

本作品のヒロイン

勉強家 伯爵家では先妻の娘として不遇の生活を送っていた

奨学金で王立学園に通っていたため学園では座学は首席だった

現在は王宮勤めの文官 (仕事できる女性)

文官の制服でいることが多い

母を同じにする弟が王立学園に通えるようにお金を貯めているので質素

ヒーローが贈るドレスは可愛らしいものが多い

ドレスアップした姿は妖精のように可愛らしく美しい

○ディオルト・ロズウェル

本作品のヒーロー

男性 26歳

ロズウェル侯爵家の嫡男 宰相 180cm

本作品のヒーロー

母校である王立学園を訪れた際に見かけたヒロインを愛している

前髪長めな銀色の髪 (正式な場面では前髪を上げる) とアイスブルーの瞳

冷たそうな見た目

ヒロイン以外の女性には興味がない

全てを手に行っているように見えるがほしいのはヒロインだけ

行動は公のためで民衆からの支持は厚い、敵も多い

ヒロインにだけ見せる表情が多く、周囲からはヒロインに好意を示していることがすぐにわかるがヒロインは天然なので気がついてくれない

本人も自分が笑っていることを周囲に指摘されて気がつくような自分の感情に疎いタイプだがヒロインに対する愛は重い

キッチリした服装 宰相なので文官の正装を身につけていることが多い
フロッグコートやマントのある正装がよく似合う

○マリアナ・イグニス

女性 21歳

本作品のいわゆるライバル令嬢

ヒーローのことが好きな公爵家三女

金の髪に巻き毛 悪役令嬢的な派手でな見た目

赤い薔薇がよく似合いそうな派手なドレス

◆あらすじ

ヒロイン・ティアーナは、ウェルシュ伯爵家の長女で、義母と妹に冷遇されている。

母と同じにする弟が王立学園に通うための学費を稼ぐことを目標にし、王城の上級文官試験を受け、宰相ディオルト・ロズウェルにより補佐官に抜擢される。

ディオルトは王国で絶対的な力を持つロズウェル侯爵家の嫡男であり、私欲を持たず王国のために尽くす宰相として国民から絶大な信頼を勝ち取っている。その一方であまりにも感情に左右されない論理的な判断を下すことから周囲からは冷酷であるとも言われている。

そして補佐官として働き始めたティアーナにディオルトが持ちかけてきたのは偽の婚約だった……。

◆課題小説

(以下から一部シーンを抜粋して、マンガ4-8P分の完成原稿を仕上げてください)

重要会議中のはずのディオルトからの急を要する報せ。

ティアーナが指定された場所は、いつも待ち合わせている王立図書館の重要書類が収められた書庫だった。

「ディオルト様……？」

いつもであればランプの明かりが灯っているはずの室内は暗い。

少しだけ胸騒ぎを感じながら一歩踏み込むと、開いていたはずの扉が音を立てて閉まった。

部屋に明かりが灯される。そこにいたのは、ディオルトが現在取り組んでいる国家的規模の事業の協力者、ランベルト公爵家の令嬢、マリアナだった。

ディオルトの姿はない、部屋から出ようとしたティアーナだが、すでに扉には鍵がかけら

れていた。

「……お久しぶりね」

「……お久しぶりです。マリアナ様」

彼女は二人の護衛を連れていて、ティアーナは本能的に身の危険を感じた。

「先日の件、考えてくださったかしら？」

「……ディオルト様は気にするなど」

一週間ほど前、ティアーナ宛に届いた一通の書簡には、マリアナとディオルトの婚約が今回の事業の条件としてあげられていると記されていた。

「いくらディオルト様が宰相で、しかもベルガモット侯爵家の嫡男だからといって今回の事業が上手くいかなければ苦境に立たされるわ。――あなたが邪魔をしているのよ」

「……それは」

それは事実であり、ティアーナは口を閉ざして俯くしかなかった。ティアーナの生家であるウェルシュ伯爵家の歴史はたしかに長いが決して裕福とは言えない。しかもティアーナは先妻の子であり、母の死後に迎えられた義母と義妹に冷遇されている。

「ディオルト様のことを考えるなら、さっさとこの書類にサインなさい」

ティアーナは押しつけられたペンを思わず握ってしまった。

書類には、ディオルトとの婚約を解消するということの他に、二度と彼に近づかないという内容が記されていた。身代わりとして記されている金額はティアーナが一生かかっても稼げないものだった。

ティアーナがディオルトの足かせになっているのは事実だ。

震える手で書類に手を伸ばしかけたとき、鍵を開ける性急さを感じるガチャガチャという音が聞こえ、扉が勢いよく開いた。

ティアーナと一緒にいるとき、たくさんの表情を見せてくれるようになったディオルト。

それでも彼の表情はいつも余裕にあふれていて、ティアーナだけが翻弄されているように感じていた。

しかし今、彼の表情はお世辞にも余裕があるとは言えない。

銀色の髪は汗で額に張り付き、その顔にはありありと焦りが浮かんでいる。

アイスブルーの瞳が細められ、端正な唇が震える。

「……誰が邪魔をしていると？」

乱れていた呼吸を無理に抑え込むような長い吐息。

その表情はティアーナを一目見た瞬間に、いつもの何を考えているのか周囲に悟られることがない冷たいものへと変わった。

「ディオルト様……」

「さっさとそのペンを地面に投げ捨てろ、ティアーナ」

今までこんなにも冷たい表情でディオルトに見られたことがなかったティアーナは息を呑んだ。そんな彼女の手首を強引な仕草でディオルトが掴む。

忌々しげにペンを取り上げたディオルトが地面にそれを投げ捨てた。
「私の婚約者に手を出すのなら、相手が誰であろうと容赦しません……」
マリアナが悔しそうに表情を歪めた。
止めようとしたティアーナの手を引いてディオルトは無言で歩き出す。
最近はいつもティアーナの歩調に合わせてくれたのだと改めて思い知らされるような歩み。ティアーナは何も口に出来ないまま黙ってついて行く。

執務室の扉を乱暴に開けるとディオルトは扉の鍵をかけた。
ティアーナは慌てて口を開く。
今、ディオルトは国王陛下も参加されている重要会議の最中だったはずだ。
いくら彼が宰相で国家の中枢に位置するといっても、重要会議の最中に私用で抜け出すなど許されるはずがない。

「ディオルト様……会議は」

「抜け出してきた」

「どうしてですか!？」

「君はなぜだと思う？」

小さく微笑んだディオルトは、まっすぐにティアーナを見つめた。

その答えを聞くのが少しだけ怖くて後ろに下がるティアーナ。ディオルトは黙ったままその距離を詰めてくる。

ティアーナの背中が執務室の壁に当たり、それ以上下がるが出来なくなる。

もちろんティアーナはディオルトのことが好きだ。

(ディオルト様と一緒にいると、温かい気持ちになって、ディオルト様にもっと笑ってほしくて……)

けれど、ティアーナは何の力もないから、いつだってディオルトに助けられ、守られるばかり……。マリアナの言ったことは全て事実だから……。

「……それで、君は俺との婚約を解消しようとしたのか？」

「ディオルト様……でも、やっぱり私はあなたに相応しくありませ……」

ドンツと音がして気がつけばティアーナは壁とディオルトの間に挟まれていた。

「君は何もわかっていない」

ディオルトが苦しげに、切なそうに、口の端をつり上げる。

それは自嘲しているようにも、懇願しているようにも、苦しんでいるようにも見えてティアーナは思わず渴ききった喉を上下させる。

「好きなんだ……どうしたら君は俺のことだけ考えてくれる？」

「ディオルト様……私」

「今は何も聞きたくない」

ティアーナの唇に強引に重なった冷たい唇。

それはいつもティアーナを壊れ物のように扱い、優しいディオルトとは違う荒々しいものだった。

ティアーナは思わずディオルトのシャツにすがりつく。

彼女の双眸から流れる涙は苦しいからなのか……それとも。

(私の涙……だけじゃない?)

唇が離れたとき、ティアーナは思わず目を見開いた。

ディオルトがあまりに苦しそうに笑っていたから。

ディオルトの将来を、立場を守りたいなら彼を突き放すべきなのは明白だ。

けれど、ティアーナは先ほどまで考えていたその思考を手放して、背伸びをして彼のことを強く抱きしめていた。